

南フランス・北イタリアスケッチ旅と

その後の日々

t . i

旅行後の一ヶ月

海外旅行から帰って間もなくの7月末に古希を迎えた。気持ちはやっと還暦を迎えたと思込むようにしているのだが、このところ歳を意識することが増えている。

8月11日、NPOの例会に出席しなければと急いで飛び出し4時半に高丸ビルに着く。エレベーターは定期点検中、やむなく非常階段を上るがドアは開かず。点検を待って3階に行くが中は真っ暗。シーバンスも20階までたまに明かりが見えるだけ。家を出る時から、なぜ夏休みの週に例会があるんだと疑いつつの出席、ノートには例会日と記入されていた。

今回は、スケッチ旅行の発表者と指名されたため出発間際まで2日間で600数枚の写真をパワーポイント120枚にまとめ上げフラッシュメモリーをポケットにしまいこんで駆けつけた。ケータイで西川理事長に問合せ8月は休会と知る。ノートの削除忘れか、古希を迎えた歳ではこれからこんな事が度々起こるだろうと苦笑いの午後であった。それでもたった2日間で手付かずの旅行の整理ができたこと、浜松町の本屋で探していた本が見つかった事、帰りに京橋界隈の街を楽しんだことなどが日頃のパソコン疲れと運動不足の解消につながりプラス思考で充実した1日?となった。

そういえば、7月初旬旅行から帰った翌日には大学の授業が待ち構えていて、その後もすぐに県立美術館で6日間のデッサン会参加、同級会出席を兼ねた2泊3日の信州旅行と千葉絵の会によるスケッチ旅行の計画案作りと安房鴨川への下見、高校時代の友人主催によるクロッキー講習3日間への参加、秋の県展出品50号作品の下絵作成、13年を過ぎた車(優遇措置を受けて)の買い換えによる操作運転練習や免許更新のための高齢者講習、大学の前期授業終了による課題評価と成績記入、加えて息子の結婚のことや相手家族との付き合い、合間をぬっては地元仲間とのゴルフとスポーツジム通いなどもろもろ

に追われた1ヶ月であった。7年前に退職した時には、これからは「毎日が日曜日」になりたつぷりある時間をゆったりと過ごす醍醐味を夢に描いていたのに。

公共機関を使つての海外スケッチ旅

そろそろ「すろうぷ会 南フランス・北イタリアスケッチの旅」に入ろう。「すろうぷ会」とは、スローライフ・スローペインティングを目指す6人の元設計部の仲間たちの会である。この仲間の海外旅行は、イタリア、ポルトガルに続く3回目の旅で、その成果?は来年8月に京橋のクボタでグループ展として2回目の発表予定。6人だけの旅は、気ままな場所で好きにスケッチできるように列車やタクシーを利用し、荷物移動が少ない2日以上連泊をベースに計画してきた。



(写真はニース駅で画材を背負い不安げに電車を待つ仲間)

画材やカメラなどの荷物が多く移動や宿泊には気を使うが、6人だけの旅行は計画が立てやすい。今回は交通不便な田舎道が多いため移動は列車の他バン型タクシー(運転手を入れた2+2+3・バゲージ)の長時間利用を多くした。宿泊はツインルームとしたが、時にはダブルベッド(1軒しかない田舎のホテルではこの部屋が5室しかない)連泊となった。

フランス語やイタリア語しか通じないところも多く、食事や料理の注文などに苦労をした。タクシー運転手付は、道中のガイド役やレストラン探しなど手助けを期待できるが、今回は運転手も初めてのルートばかりでカーナビ頼りの峠越えや国境越えとなった。

旅行ルートは、南フランスと北イタリアのごく狭い範囲であるが、コート・ダジュールの海岸から山麓地帯の山村を見て終盤はリヴィエラの海で疲れを癒す旅で、ニースのアイアンマンレースを見て締めはモナコ周辺を走るツールド・フランスのTV画像をホテルで追う旅でもあった。今回は3つのテーマに絞って旅の報告とする。

イタリアで最も美しい村のひとつ・・・トリオラとアプリカーレ

これらの集落を訪ね、終日スケッチ三昧に過ごすのが今回旅行の主目的であった。リヴィエラ海岸からわずか数十キロ内陸に入ったフランス国境に近い場所であるが、アルプス山脈が南下して国境となっているため、山深い山麓地帯に造られた集落である。海岸に近いのだが、気候は山岳的で夕方に雨が降る日が多かった。イタリアの多くの集落と同様外敵から身を守る集落形成であり、自然が障壁となるべき地形が選ばれている。これらの集落は、交通の便が悪いためまだまだ観光客は少ない。

トリオラ・アプリカーレ共、イタリアで「最も美しい村」に選ばれている歴史の古い景観の美しい村である。ちなみに「最も美しい村」とは、人口 1.5 万人以下の小さな村が対象で、イタリア全土で約 158 の集落が選ばれ、遺産財産の擁護・再評価といった保存活動と美しい観光資源を生かした活性化につなげている。



トリオラもアプリカーレも集落全体が 1 つの塊になっていて、その塊の中をせまい路地が這いまわり、路地の上はいたる所アーチ状の繋ぎが架けられて路地は薄暗く急勾配で至る所に階段状の段差がある。ご多分にもれず若い人たちは村を出て、多くの住民は高齢化している。バリアフリーからはかけ離れているが、昔から至極当然と老人たちは元気に自給自足的な生活を送っているようだ。このような石の集落は廻りの自然と溶け込んで、いずこもスケッチポイント



となり、描く場所を絞るのに苦労する。

アプリカーレの村では偶然カッシーニ氏（お母さんの一周忌でアメリカからこの村に帰国中）にお逢いし、中世から続く石造りの住宅内部を見せていただいた。そこで彼のお母さんが「小さな村の物語 イタリア」(BS 日本テレビ第 7 話アプリカーレ 2007.12.30)「遠く離れた家族を思い一人で暮らす老女」として日本で放映されたと教えられた。ワンルームほどの小さな住宅の中でその CD を見せていただき昔の生活ぶりを聞いた後、村全体を鳥瞰できるビューポイントの山の上に案内していただき村の歴史や保存活動などいろいろと解説していただいた。ツアー旅では味わえない貴重な経験になった。(写真は山の上からの石田スケッチ)

南フランスの知られざる「鷲の巣村」を訪ねて・・・ペイヨンとペイユ

鷲の巣村とは、もともとサラセン人の攻撃から逃れるため、相手から見えない場所に村を作ったのが始まり、村に入れば細い通りが迷路のように入り組み、敵が容易に侵入できない集落形成となっている。コート・ダジュールには 100 を下らない数の鷲の巣村があるとされている。

鷲の巣村のひとつであるペイヨンやペイユは、ニース海岸からわずか 15~20km 内陸に入っただけであるが、山麓深い秘境の地にある。人を寄せ付けない難所とも云うべき地形を選んで集落が形成されている。

特にペイヨンは、見上げるばかりの絶壁の地にあり人のアプローチを拒絶している。そのような集落でも、最頂部に作られた思いのほか大きい教会と広場を中心に、住宅群が形成されている。外敵から身を守るための工夫と、生活の場としての住まい造りが、レベル差を巧みに利用して緻密に造られている。設計者としては、計画図面はあったのだろうかと考えてしまう。また、周辺は岩山ばかりで森林と呼べるものはなく、平地もないため生活の糧はどうなっていたのだろうか。



現在は村に店舗はなく、近くの街に下りて買い物をしている。集落の狭い路地は子供たちの遊び場になっていた。現在は中世の風情が人気となって若い家族がこの地に住み着いているようだ。不便を越えた魅力が解るような気がした。

ペイヨンが山麓の頂部に造られているのに対し、ペイユは険しい山麓の傾斜地に等高線に沿って作られた集落である。いずれも外敵が侵入するとすれば、



僅かのルートしか想定されない造りで、防御最優先に造られている。水の確保や食料の備蓄には苦勞されたであろう。今は村の入口まで細い山道を普通車で入れるが、集落の中は幅2mほどの石畳の路地で勾配がきついていたところ

に階段があるため荷物の運搬は人力頼みである。その階段を登りきったところに想像を超える規模の教会と広場があり、教会の塔は集落と一体となって周辺からのランドマークとなっている。

これらの集落形成を観るたびに、中世の外敵から身を守ることの重大性や住民のアイデンティティ形成に多大なエネルギーが使われたことに驚く。翻って現在の我々は、平和で安全である社会に漫然と生活していて、身を守るためにどうすべきかをあまり深く考えてこなかった。今こそ温暖化への対策、基地問題や北朝鮮問題などの国防問題、国を超えたテロリスト問題、情報防衛や情報災害対策、異常気象や巨大地震などによる自然災害、身近に起きている様々な災害対策まで、身を守ることを個人・家族・社会・国・地球それぞれのレベルで真剣に考え、安全な社会を持続させる対策を講ずるべき時と思う。

画家たちがこよなく愛した村や街…ニース、マントン、ドルチェアックアなど

プロバンスからコート・ダジュール、リヴィエラ海岸一帯は、芸術家たちが愛した街が目白押しである。林 武や三岸節子他日本からも多くの芸術家が訪れ制作している。

我々が初日に訪れたニースの街にはマティス、シャガールをはじめ合計6か所の美術館があり、唯一訪れたマティス美術館は邸宅が並ぶ丘陵のオリーブ

の木々に囲まれた公園内にある。ヴァンスのロザリオ礼拝堂の装飾を手掛けた習作と礼拝堂の模型・壁画のデッサン、ステンドグラスの華やかな色彩が見ものであった。これらはマティスの人生の集大成であり創造エネルギーの全をこの礼拝堂に傾けたと言われている。これだけの美術館の入観料が無料であるのはうれしい。帰り道の邸宅街はすばらしく目をみはるばかりであり、その使われ方に世界の金持ちの姿を想像した。

国境の街ヴェンティミア（イタリア）から数キロ内陸のドルチェアックアもクロード・モネをはじめ多くの画家たちに愛された街で、我々も時間を惜しむように夢中に



なって川に架かる石橋と城址をスケッチした。

（写真は斎藤さん作品 ドルチェアックアの城址）

旅の終盤に立寄った国境近くのマントン（フランス）は、ニースほどの観光地にはない落ち着いた海岸の美しい街で、ジャン・コクトー美術館があり、近くにはコルビジェの別荘もある南仏のリゾート地である。

（写真はマンントンの石田のスケッチ）



マンントンのリゾートホテルはヴァ

カンス客のほかツールド・フランスにあやかった自転車愛好者客が多く、老若男女が朝早くから自転車で走り回るルートに出て行った。我々はこのリゾートホテル（旅行中では一番デラックス）でゆっくりと過ごし、それまでの山麓集落の絵から開放的な海岸スケッチの絵に夢中になった。

現地制作のスケッチ画は、描き損じや未完成作品で有っても、現地で描いた感覚と勢いがにじみ出て、後で描き直したものでは追いつけないスケッチの良さが解ってきて、これからもスケッチ旅行は止められないとつくづく思う。



(写真はコート・ダジュール海岸で泳ぐ？斎藤・安永さん)

そして年末を迎える頃となり

なぜか海外旅行中は、皆さんとても若々しくバイタリティの有る行動が出来たことを思い起こせば、旅行は「老化防止の若さを保つ秘訣」の有効な手段であろう。普段の生活に戻れば、物忘れなどドジばかりの毎日となるのはどうしてだろう。相応の刺激とある程度の緊張感を保つことが必要となれば「毎日が日曜日」の生活は避けた方が良くもしいない。

この頃建築の仕事やそれにかかわる業務から少しずつ離れだすと建築学会や建築士会や業界情報も減ってきて、美術協会の役員の仕事や絵の会の幹事仕事、元 BCS 設計部会千葉会、スポーツクラブやゴルフ仲間、千葉諏訪の会（高校同窓会）や旅行仲間などと地元の人たちとの交流が増えてきた。一方で、なぜかしばらくご無沙汰していた昔の清水の仲間からの旅行や山登りやゴルフの誘いなど突然舞い込んでくることも多くなった。そうしたコミュニケーションを通して、従来は好奇心の多さや身体の柔軟性などの若さをそれとなく自慢してきたが、最近では例えばゴルフの飛距離とか趣味や健康の話で、相手より高齢であることをそれとなくほのめかしたりして歳の割には・・・と話す自分が情けなくなるこの頃である。

退職後の第 2 の生活は、現役からの区切りをはっきりさせたもののその周辺ないしは延長線上で、現役では出来なかったいろいろな活動や、新たなコミュニケーションの場が増えてそれなりに新鮮で興味深く活動出来たと考えている。古希後の次なる 10 年を第 3 の生活に入ったと考え、加齢と向き合いながら社会との繋がりを深め新たな生活を創ってみたいと楽しんでいる。

NPO の活動を盛り上げると共に、生涯現役と頑張っている方のバイタリティや先輩からの高齢者としての生活の知恵、若い人たちの多様な生活振りなどをマイスターネット例会や活動を通じて、更に飲み会等で皆様方とお話しできれば、社会貢献活動に加えメンバーそれぞれの豊かな生活のヒントが生まれるだろうと期待している。



写真は芦沢さんの油絵 30 号作品「クオバデス」（どこへの意…イタリアチェリアーナの教会から）

2009.11.30 t. i 記